

感謝法悦の實現

二八六

鈔『只南無妙法蓮華經の七字五字を日本國の一切衆生の口に入れんとはげむばかりなり、此即ち母の赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり』(八幡鈔)との大慈大悲の御精神の下に眞に目醒なかつたなら、我不愛身命但惜無上道の大信念を以て大法を弘通し今日の基礎を固められた先師先聖の御本意に反するのみならず、我が宗門の上に光輝ある歴史から永遠に葬り去られる時が將來する事は明らかである。宗門をして此の没落の段階より救ひ出だし泰山の安きに置くもの、それは名聞財利を求めて反省する事を知らぬ老僧政治家ではなくして、只感激に満ちた純眞な血潮に燃ゆる我々青年佛教徒の一大使命であると思ふ、我々には分に過ぎた僧階も名譽もいらぬ、唯だ願ふところは宗門の興隆と大聖人の偉大なる御理想を少しでも多く實現せしめたいと欲するのみだ。

感謝法悦の實現

人生に於ける無上の幸福は、信仰の体験によつて得られる感謝法悦の實現にある。世間のあらゆる醜惡なる慾望に超越して、心、清淨に感謝法悦の境地に安住して、本佛に歸命禮拜する其の敬虔な態度こそ、本化信仰の究極の目的であり、人生最大の理想でもある。譬へ巨萬の富を擁し、最高の名譽と無上の權力とを獲得しても、煩惱の常闇に迷へ、世間の慾望に齷齪して徒

佛法を忘れて世法にのみ執着する徒輩にどうして此の一大聖業を完成する事が出来得やうか、それは恰も猿を離れて肝を求むるの愚である。

將に今、世は混沌として眞の宗教にオアシスを求め、宗教家目醒よ！と我等に迫つて居るのだ。曉の鐘の音と共に無自覺から自覺への一大飛躍を試みようではないか。

『止眼斷眠以つて悔を千載に残す事勿れ』『二陣三陣つゞけよかし』の聖訓を休して立正安國一天四海皆歸妙法の大幟を翻翾と別頭の丘に打ち樹てようではないか。

宗門淨化、宗門發展の血潮に燃ゆる宗教家の卵達は斯く絶叫するのである。

(一〇、一〇、一七 統學寮にて)

下 邨 顯 淨

に一生を費やす人こそ眞に憐れむべき人である。

佛は法華經に、

「今此三界皆是我有^乃唯我一人能爲救護」と、又は「每自作是念^乃速成就佛身」と、説かれて居る。

即ち本佛は、三界の衆生に對しては主、師、親の三徳を具して居られ、然して衆生を救済するを以て本懷とせられ、他に餘念

無しとの意である。誠に感激に堪えない程の有難い御思召ではないか。斯く廣大無邊の大慈悲と、宇宙法界の眞理を證得し十界の眞相を達觀する、光明燦として輝く大智とを以て、久遠の本佛は、無始の太古より無限の未來に向つて、常住不滅の生命を有し、九界の生死海に流轉する迷の衆生を救済せられる爲に不斷の活動をされてゐるのである。斯様に絶大なる佛恩に感謝し、法悦に安住して、本化の信仰を支持こそ人生に於ける最も有意義なる修行の實現であり、且無上の幸福でもある。

更に宗祖の生涯を拜する時にも、あの鬼神をも屈伏さすべき剛膽不屈なる折伏主義の弘通の内面には、三寶に對する感謝報恩の信念が、常に湧溢してゐた事が拜察される。即ち建長五年開宗の朝より、弘安五年入滅の夕に至るまで、大難四ヶ度小難數知れず、六尺に足らない身を所致するに困窮せられる程の迫害を身に被り乍ら、些も恐怖的態度を示されないで、堂々と所信を主張せられてやまず、然も佐渡御勘氣抄（七〇一）には、「日蓮は日本國東夷東條安房ノ國海邊の栴陀羅が子也。いたづらにくちん身を法華經の御故に捨まいらせん事あに石に金をかふるにあらずや云々」と仰せられてゐる。

即ち値難き法華經に値遇し、偉大なる三寶の御恩を被りて法華經の御爲に賤しき身を犠牲にすると云ふ事は眞に身に餘る光榮とする所であるとの意である。斯様に宗祖は激烈なる迫害を受けつゝも、常に三寶に感謝し法悦に住して居られ、其の一難の加はる毎に益々信念を強固にせられ、愈々強盛なる折伏弘通に精進せられた事が諸御書を拜する事によつて容易に拜察さ

れるのである。

されば今吾人が、宗祖傳來なる本化の信仰を繼承して之を支持するには、必ずこの感謝法悦の信念が、常に信仰の根本的動力となつて顯はれてゐなければならぬ。之に源を發するものでなければ純正の信仰とは云ひ難い。然るに世間には斯かる信念を懷かずに、唯自己の慾望を成就せんが爲に信仰をする者が往々にして見られるが、斯様な信仰は極めて打算的であり、兎角永續性が伴はず、所願成就した後は所謂「咽喉もと過ぐれば熱さを忘れる」の做で、次第に退歩的になり、終には全く無信仰に陥り易いものである。斯様な信仰であるならば、一時は如何に努力精進するとも、恐らく究竟の目的たる成佛をば期待し難いものであらう。

末法下機の衆生は所謂思想濁惡の重病者である、隨つて徒に甚深幽遠なる法華經の教義を以て衆生に應ずる事は、佛の本懷にかなはず、その得る所の利益は極めて微々たるものであり、此の時に於ては所謂五字七字の題目修行こそ、平易にして然も内容最も勝れたるものなれば、重病者には最も適する時機相應の修行方法である。

最近數多の類宇宗教が頻々として勃興し、既成宗教に挑戦すべき傾向が見られて來たのである。之によつて吾々に影響する所は甚だ大なるものがある。吾人は此處に於て大いに自覺しなければならぬ。そして本化門下の本旨たる國土淨濟をモットーとして奮起し、正しき宗教家としての使命を全し、能所共に正しき信仰に安住して感謝法悦の生活を實現こそ吾人の理想とする所である。

（昭和 一〇、二〇 於身延山法喜寮）